

もいおの教室

よ ほんやく ひょうじゅん
「余は翻訳の標準」

ふたばていしめい
二葉亭四迷



作 どんちゃん

もいおの教室

よ ほんやく ひょうじゅん
「余は翻訳の標準」

ふたばていしめい
二葉亭四迷



作 どんちゃん

明治（めいじ）まえの元治
（げんじ）のときのえらい
ほんやくかさん 二葉亭四迷
（ふたばていしめい）の作品
をわかりやすくせつめい
しようと思います。



←もりお

浮雲（うきぐも）や、
其面影（そのおもかげ）は
代表作だけど、ほんやくか
として、とても深い作品
「余は翻訳の標準」（よは
ほんやくのひょうじゅん）
をせつめいするよ。



それでは、じゅんぼんに
森のみんなに読んでもらい
ながら、説明するね。



それでは
のぐちさん
読んでください

どう翻訳（ほんやく）していいの？人それぞれちがうからこれとということをしていことができない。
だから、じぶんが今までやってきたほうほうをかくことにする。
ヨーロッパのことばを声を出してみると、ひとつの音のちょうしがある。



音楽てきでミュージカルの
ようだ。
だから、よむのを聞いている
のもなかなかおもしろい。
じっさいにやくす時は文字
を黙読（もくどく）するけれ
ど、わからないちしきで声
を出してよむとおもしろく
感じる。



むずかしい言葉で、黙読
(もくどく) とある。
これは、声にださないで
目でみながら文字を読む
ことだよ。
わからない国の言葉は
きいてるだけでミュージ
カルみたいでおもしろい
って書いてある。



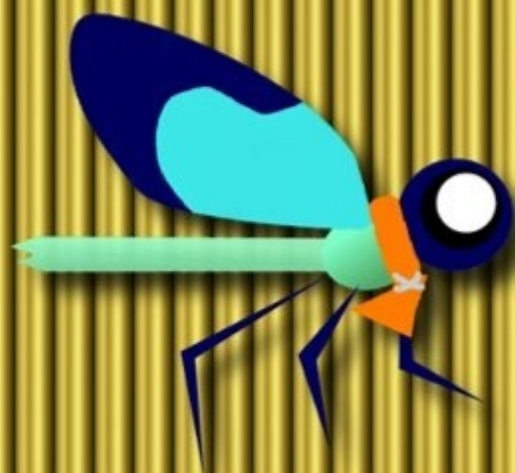
では、次は
ボブおねがい

日本語にはこの音のちょうしがない。モノトナスだ。

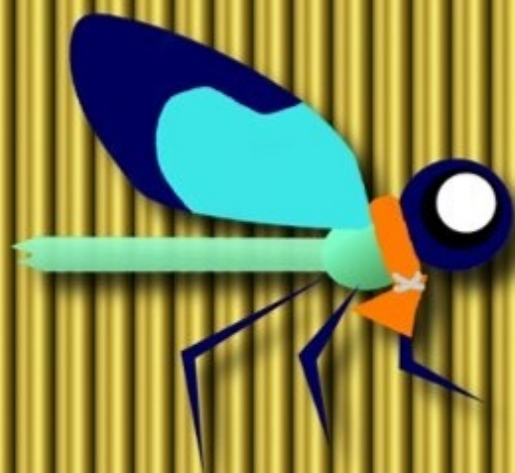
また、音の抑揚（よくよう）がわからなかったり、読み方が正しくなかったりする時に声を出して読むのは不適切

（ふてきせつ）である。

でも、外国語をほんやくしようとするからには音のちょうしも考えてやくさなくてはいけないと思ったので、こういう方法をひょうじゅんにしていた。



そこで、コンマやピリオドのくぎり方を研究（けんきゅう）してみると、さっそく目に着いたのは、同じことばを重ねて言うことである。例をあげると、マコーレーの文章（ぶんしょう）などによくある *in spite of* のようなことばである。いみを伝えるには2つか3つつ、4つつの節（ふし）で十分であるものを、もう1つ言いそえることがある。



むずかしい言葉で、抑揚
（よくよう）とある。
これは、声のトーンのこと
不適切（ふてきせつ）は、
まちがえといういみだよ。
in spite ofというのは英語
で、インスパイト オフ
って読むよ。



日本人はオーバーに話しをしたりはしないよね。
外国語をほんやくするとき
は、そういった感情（かん
じょうてき）なこともやく
さないといけないって書いて
あるよ。



そして、コンマとか文の
くぎりをけんきゅうした
らなんども、同じような
言葉がならんでることが
多いことに気がついた
みたいだよ。
ややこしいいいまわしが
多かったのかな？

それでは次
びーちゃん



しかし、やくはずでに言いつくしてあるし、意味のちがったことを書くわけにはいかないのでしかたなく重複（じゅうふく）して余計な事を言う。

これは、日本語の「やたらむしょう」などに似ている。

「強くきびしく彼をせめた」とか、「やさしくかど立ためようにせつめいした」とかはヨーロッパの言葉でよく見る表現（ひょうげん）である。



これらは意味（いみ）をあきららかにする以外、副詞（ふくし）を入れたいから入れたたり2つで十分に足りている形容詞（けいようし）も、1つくわえて3っつにしたりする。コマの切り方なども、単（たん）に意味の上から切るばかりではなく、ふしの関係（かんけい）から切る場合（ばあい）が少なくない。



やくす時に、「やたらむし
う」みたいに、にたことばが
並（なら）んでいて訳すのに
こまったみたいだよ。ことば
の表現（ひょうげん）ってむ
ずかしいんだね。

それでは次
トビオ
おねがい



外国の文を翻訳（ほんやく）する時に、いみばかりを考えてこれに重点（じゅうてん）をおくと原文（げんぶん）をこわしてしまふおそれがある。原文の音調（おんちょう）をよく考えてそれをうつせるようにならねばと、自分には信じていたのでコンマ、ピリオドの1つも大切に、原文にコンマが3つつ、ピリオドが1つあれば、訳文にもピリオドが1つ、コンマが3つつという風にして原文の調子をうつそうとした。



ほんやくを始めたころは、ごす
うも原文と同じくして、かたち
もくずすことなく原文の音調
(おんちょう)をうつす目的と
して、形の上でたいへん苦勞
(くろう)したが、じっさいは
思うようにいかなかった。翻訳
している時にはどうしても自分
の標準(ひょうじゅん)に合わ
すことができないものもあっ
た。自分は自分の標準にそって
訳すだけのうでがないとあきら
めたこともあったけど、それは
本意(ほんい)ではなかったの
で、しばらくこの標準をつかわ
ないで訳していた。



いみを考えて訳すと、文をこわしてしまおうと考えていたんだね。言葉のトーンも入れながら1字1字ていねいに訳していたことがわかるよ。



でも、1字1字ていねいに訳すことは、うまくいかないことも多かったんだ。
自分のそのやりかたに自信がなくなって落ち込んでいた時があったんだね。
それでも、がんばったんだ。



次は
ひげお

しかし、できあがった訳文を見てみると、佶僣牙（きくつごう）だ、いやじつに文章（ぶんしょう）が、かたくるしく読みづらいし見栄え（みばえ）も悪い。だからせけんの評判（ひょうばん）も悪い、たまたまほめてくれる人もいたけれど、だいたい非難（ひなん）の声が多かった。私が苦勞してそれができそこないだったのかと思っていたけれど、これが失敗しているとしてきする人もいないし、また、どのぐらいまで成功（せいこう）したのかと好意的（こういてき）に思う人もなかった。



なので、ほめられても自分の
思っていた標準とはかんけいな
く嬉（うれ）しくもなければ、
非難（ひなん）されてもけんとう
うちがいなので、なんの啓発
（けいはつ）されるところもな
かった。

自分とのたたかいだったので、
ほめたり悪口（わるくち）を言
われても平然（へいぜん）とし
ていて、そのことだけに苦勞
（くろう）していた。



というのは、文学（ぶんがく）
にたいする尊敬（そんけい）の
ねんが強かったので、ツルゲー
ネフが作品を作る時の気持は非
常（ひじょう）に神聖（しんせい）
だったので、それをほんや
くするのにもどうように神聖で
なければいけないと一字一句
（いちじいっく）といえども大
切にしなければならぬとしん
じていた。



自分でせっかく訳した文だけ
ど、かたくるしくて良いでき
じゃなくて、ひょうばんも良
くなかったんだ。
どのぐらい失敗（しっぱい）
したのか、どのぐらい成功
（せいこう）したのか、わか
らなかったんだね。



ほめられてもうれしく感じないし、ダメダシされてもなんかピンとこなかったんだね。悪口（わるくち）も多かったみたいだけど、関わらないようにしてたんだけどそのことで苦しい思いをしてたって書いてあるよ。



ツルゲーネフは、ロシアの貴族（きぞく）で有名（ゆうめい）な小説家（しょうせつか）だよ。

二葉亭四迷は、とても彼を尊敬（そんけい）していて1文字1文字ていねいに訳さなくちゃいけないんだと信じていたんだね。

それでは
ルミおねがい



本文（ほんぶん）のぶんたいの形はその作者の感情（かんじょう）によってことなるので、ツルゲーネフにはツルゲーネフの文体があり、トルストイにはトルストイの文体がある、この事は日本でも中国でも同じことで、文体はその人の感情と密着の関係があって、各自（かくじ）異（こと）なっている。



したがって、これを翻訳するの
でも、あるいっしゅの文体を
もってだれにでも当てはめる訳
にはいかない。ツルゲーネフは
ツルゲーネフ、ゴルキーはゴル
キーと感情を理解（りかい）し
て、厳しく言うと、行住座臥
（ぎょうじゅうざが）生活すべ
ての面で原作者のようにして、
ちゅうじつにその感情をうつす
ぐらい位でなければならぬ。
これは、翻訳をする上で根本的
（こんぽんてき）な必要条件で
ある。



トルストイはロシアの小説家でロシア文学の巨匠（きょしょう）とよばれていた人だよ。ぶんしょうは人によって書き方がちがうからそれを考えなくちゃいけないんだ。作者の心を読み取るために生活全てを合わせたりもしていたんだね。



では
ぴよみさん

ツルゲーネフを例にあげると、彼の感情（かんじょう）は秋や冬の季節ではない。春の季節（きせつ）である。春でも初春（しょしゅん）でも中春（ちゅうしゅん）でもなく晩春（ばんしゅん）の季節である。ちょうど満開（まんかい）に桜が咲きみだれて、ややちい始めようかという季節だ。



遠くかすんだ中空（なかぞら）
に、美しくおぼろおぼろとした
春の月がてっている晩（ばん）
に、両側（りょうがわ）に桜の
うえられた細い長いみちをたど
るようなおもむきがある。
訳すと、はなやかで美しい時な
のにどこかさみしい所があるの
が、ツルゲーネフの感情であ
る。



そして、その当然（とうぜん）の結果として、彼の小説には全体にその感情が行きわたっているのだから、これを翻訳するにはその心持（こころもち）を失わないように、常にその人になって書いていかないと、たまに文調にそぐわなくなる。



ツルゲーネフは、晩春（ばんしゅん）の気持ちがとても強かったんだね。桜はよく女性に例えられるけど、ここでもきつとそういう表現なのかもしれない。ツルゲーネフはパリのオペラ歌手の女性に一目ぼれしていたらしいので、ロシアに帰りがけに見た桜がキレイだったのかもしれない。ちょっと切ない感じだね。

それでは次
はぶよさん



このとき、むだにコマンドやピリオドの形ばかりにこだわってはいけない。根本的（こんぽんてき）な文体をよく読みこんで文体をくずさずにほんやくするようになければならない。じっさい自分がツルゲーネフをほんやくする時は、骨（ほね）をおってその感情をわすれず、まことに自分自身の感情とどうかかして翻訳するつもりだったが、どうもうまく成功しなかった。



成功（せいこう）しなかったと
はいえ、標準（ひょうじゅん）
はやはりそこにあった。
ただ、自分がその間にいろいろ
と考えて見ると、自分の立てた
標準にそって翻訳することは、
必ずしもできないと断言（だん
げん）されるかもしれないけれ
ど、少なくとも自分のものは難
しいやり方であると思った。



ツルゲーネフの文章をやくす時は、ツルゲーネフの気持ちと自分の気持ちを合わせるようにして訳したけれど、わからないことが多かったんだね。そのように気持ちを合わせることで、翻訳の標準を見つけていたのだけど、かなり難しいやり方だったんだね。



それでは
ぶーちゃん
おねがい

じぶんには日本の文章（ぶんしょう）がよく書けない。日本の文章よりはロシアの文章の方がよくわかるような気がするぐらいで、原文（げんぶん）のいみを取り入れる力はあるけれど、これをリプロデュースする力がともなっていないのだ。他に翻訳の方法（ほうほう）はないものかといろいろ研究（けんきゅう）してみると、ジュコーフスキーの訳の仕方がおもしろいと思った。



ジュコーフスキーはロシアの詩人（しじん）であるが、翻訳家（ほんやくか）として有名。バイロンを多く訳しているが、それがとてもうまい。当時ロシアは、社会状態が小バイロンをさかんにくんだ時代で、ジュコーフスキーは凡人（ぼんじん）の中でもすぐれている人だったから、何もしなくてもバイロンの詩想（しそう）と合っていて大きく成功したのかもしれない。しかし、その訳文はロシア文なのである。



日本語は世界的にも複雑（ふくざつ）な言語だから、二葉亭四迷もロシア語のほうがわかりやすいと思っていたみたい。

ジュコーフスキーの訳の仕方が面白いと思って、いろいろ研究してみたんだね。



バイロンは、イギリスの詩人だよ。ジュコーフスキーは、バイロンの詩を多く訳していたのだけど、ほかにも多くの人がバイロンの詩を訳する中大きく成功した人なんだ。

でも、その訳はロシア語だから二葉亭四迷は日本語に訳していたんだね。



次
おかっぴき

これをバイロンの原詩（げんし）とくらべてみると、そのいい方が大変違う。漢詩（かんし）の絶句（ぜっく）および律詩（りっし）で、第1句（く）の第2字の漢字の種類（しゅるい）のルールがあるのだけれど、原文の仄起（そっき）を平起（ひょうき）としたり、平起を仄起としたり、原文の韻（いん）のあるのを無韻（むいん）にしたり、原文にない形容詞（けいようし）や副詞（ふくし）をつけてかってに文章にてをいれている。



ようするに、ほとんどの原文
（げんぶん）を全く（まったく）
こわして自分勝手（じぶんか
かって）な形とし、意味だけ
を訳している。この両者
（りょうしゃ）をよみ比べて
みるとどうであろう。



漢詩（かんし）は、中国の詩のことだよ。バイロンの詩は中国の漢詩にも訳されていたんだね。でも、その文は漢詩のルールをだいぶくずして勝手（かってに）に訳されていたんだ。読み比べてみるとどうなのだろう？



次はクイナ

英文（えいぶん）はもともと得意（とくい）ではない方であるので、あまり大口（おおぐち）をたたく訳にはいかないけれど、とにかく原詩（げんし）よりも訳の方がおもむきや感情もよくわかる、原文（げんぶん）では10回よんでもわからないけれど、訳の方では一度（いちど）であれこれいい所がわかってくる、しかもそのインプレッションを考えると、いかにもバイロンのようだ。



ようするに、不確か（ふたしか）な英語でバイロンの詩をあじわうよりは、ジュコーフスキーの訳を読む方が読みやすく得る物も多いのである。



英語が苦手ということもあるけれど、原文（げんぶん）を読むよりも訳を読んだ方がわかりやすくいろいろ得られるものも多かったんだね。インプレッションは印象（いんしょう）っていう意味だよ。

インターネットのWebサイトを見てくれた数（かず）をインプレッション数（すう）っていうね。

次はひげお



翻訳（ほんやく）はこうせねば
成功（せいこう）しないと思
いました。自分のやり方では形に
こだわる結果（けっか）、文章
表現（ぶんしょうひょうげん）
がしばられてしまうので、読み
ずらく窮屈（きゅうくつ）にな
る。これは程よくジュコーフス
キーのように、形は全く別にし
て原作に含まれる詩想（しそ
う）を表現した方がいい。



そうは思ったけれど、自分はと
ても臆病（おくびょう）だから、
それならやってみようとは、
なかなか決行することが出
来なかった。何故（なぜ）かと
いうと、ジュコーフスキー流に
やるには、自分に十分な文章表
現があって、たとえ原詩（げん
し）をくずしても、その詩想
（しそう）に新しい形で付け加
えることができなくてはならな
いのだが、自分にはこの文章力
（ぶんしょうりょく）に不安だ
と思ったからだ。

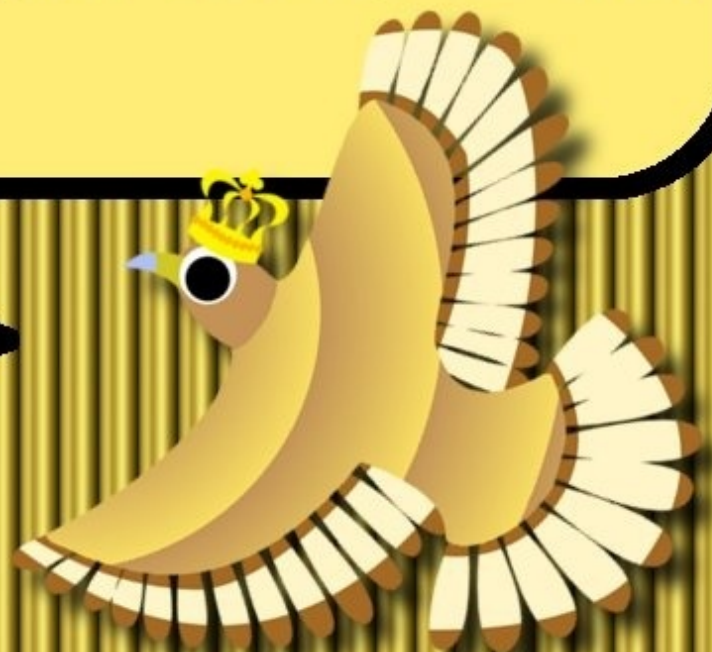


やっぱり翻訳（ほんやく）をするからには、わかりやすくその作品を引き立たせるように訳したほうが良かったんだね。
でも、文章力（ぶんしょうりょく）に自信（じしん）がなかったからジュコーフスキーのように大胆（だいたん）に原文（げんぶん）をくずしたりできなかったんだ。

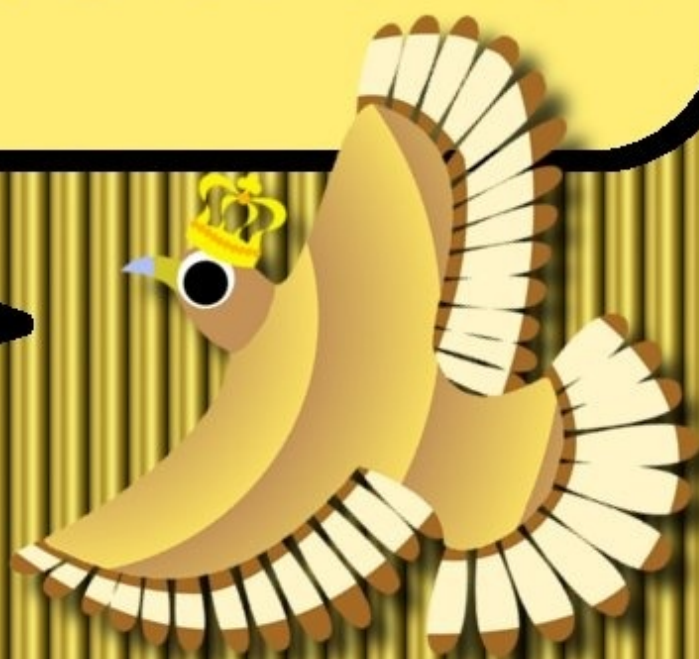
それでは
最後トビオ



従来（じゅうらい）やってきた
翻訳法（ほんやくほう）で見ると、
成功（せいこう）はしないかもしれないけれど、
形は原文（げんぶん）にそっているから
失敗（しっぱい）することは少ない。
しかし、ジュコーフス
キー流にすると、成功すればスター
になれるが、もし失敗したら
最後、これほどみじめなもの
はないのだから、よほど自分の
腕（うで）を信じないとやりきれない。



自分はさすがにそれほど大胆
（だいたん）ではなかったの
で、どうも不安に考え、困難
（こんなん）や反対（はんたい）
をおしきって強い態度（たい
いど）で実行することができな
かった。なので、旧翻訳法
（きゅうほんやくほう）のまま
やっていたが、しかしそれは以
前自分が真面目（まじめ）な頭
で、翻訳（ほんやく）をしてい
たころの話であって、近頃（ち
かごろ）はもうそうしなくなっ
てしまった。



二葉亭四迷（ふたばていしめい）もジュコーフスキーのような訳を試してみようと考えたこともあったみたいだけど、失敗（しっぱい）したらみじめと思ったんだ。そう思うと原文（げんぶん）をそのまま訳していたほうが失敗なかったんだね。

自分のうでに自信（じしん）がなかったことと不安（ふあん）が大きかったんだね。



困難（こんなん）や反対（はんたい）をおしきって強い意思を持って実行することはなかなかできないことなんだね。
その壁（かべ）に直面して、翻訳（ほんやく）することをあらためて考えなおしたんだ。
最後の文に「もうそうしなくなくなってしまった」って書いてあるけどこの文の意味はちょっと深そうだから考えてみてね。



もりおの教室「余は翻訳の標準」二葉亭四迷

<http://p.booklog.jp/book/23958>

著者：どんちゃん

WEB PICTURE BOOK Ding-Dong <http://donchan.org>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/23958>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/23958>